資　料

全国食肉衛生検査所協議会病理部会研修会（第66回）における事例報告（Ⅰ）

戸室　健太郎†

全国食肉衛生検査所協議会病理部会事務局栃木県県北食肉衛生検査所
（〒324-0063　大田原市町島66-2）

Proceeding of the Slide-Seminar held by the National Meat Inspection Office Conference Study Group (66th) Part 1

Kentaro TOMURO†

Meat Inspection Office of Tochigi Prefectur Northern,
66-2 Machijima, Ootawara-city, 324-0063, Japan

（2016年3月28日受付・2016年12月2日受理）

全国食肉衛生検査所協議会病理部会が主催する第66回病理研修会が2013年5月23，24日に麻布大学で開催された．今回は21機関から再提出を含め，No. 2213，2221，2224，2232，2244～2261の22題について討議された．No. 2244，2245，2248，2253及びNo. 2257については再検討となり結論が持ち越された．また，No. 2252，2260については追加報告された．以下にこれら15事例の概要を示す．

また，第66回病理研修会提出演題から，演題No. 2213鶏の体腔内の腫瘤〔谷村美穂（高崎市）〕，No. 2256豚の全身性腫瘍〔菊地茉莉花（群馬県）〕，No. 2261牛の口腔腫瘤〔大坪幸司（長崎県）〕が優秀演題として選出された．

事　例　報　告

1　鶏の体腔内の腫瘤

〔谷村美穂（高崎市）〕

症例：鶏（採卵鶏），雌，719日齢．

生体所見：著変を認めず．

肉眼所見：腸間膜や腹腔内脂肪の表面に直径2～20mmの黄白色～桃灰白色の腫瘤が多数認められた．腫瘤は十二指腸付近に密発し，一部は嚢胞状及び塊状を呈していた．腫瘤は光沢及び硬結感を有し，表面には軽度の出血が認められた．腫瘤の割面は乳白色分葉状でやや膨隆していた．同様の腫瘤が肝臓，卵管にも認められた．肝臓では，胆管付近に大豆大の腫瘤が数個認められた．卵管膜には小豆大の腫瘤が1個認められた．各腫瘤は剝離が困難であったが，臓器との境界は明瞭であった．その他の臓器に著変は認められなかった．

組織所見：腫瘤では好酸性の細胞質に富んだ，円形から紡錘形の腫瘍細胞（上皮様細胞）が島状，腺管状または乳頭状に増殖した部分と，小型の間質細胞が束状に交錯するように増殖した部分が認められた．これらの腫瘍細胞は大小不同で，クロマチンに乏しく1～数個の核小体を有する核をもつものから，クロマチンに富んだ核をもつものまでさまざまであった．線維化を伴う腫瘍組織が肝実質に一部浸潤していた．腫瘍の間質はPAS染色に陽性を示した．腫瘤組織の間質に認められた，コロイド鉄染色陽性を示す物質はヒアルロニダーゼ消化試験により消化された．免疫染色では，腫瘍細胞はビメンチンに陽性，オボアルブミンに陰性を示した．濾胞内の物質はオボアルブミン陽性を示した．上皮様細胞はサイトケラチンに陽性，エストロゲンレセプターに陰性，プロゲステロンレセプターに陽性を示した．

診断名：卵管腺癌

討議：討議の中で組織像や染色性の比較から卵巣腺癌

† 連絡責任者：戸室健太郎（栃木県県北食肉衛生検査所）
〒324-0063　大田原市町島66-2　☎0287-22-5565　FAX 0287-22-8923
E-mail : kenpoku-sek@pref.tochigi.lg.jp
† *Correspondence to : Kentaro TOMURO (Meat Inspection Office of Tochigi Prefectur Northern)*
66-2 Machijima, Ootawara-city, 324-0063, Japan
TEL 0287-22-5565　FAX 0287-22-8923　E-mail : kenpoku-sek@pref.tochigi.lg.jp

も否定しきれなかったが，肉眼的特徴に基づき卵管腺癌と診断した．

2　牛の全身性腫瘍

〔今野説子（仙台市）〕

症例：牛（ホルスタイン種），雌，12歳10カ月齢．

臨床事項：健康畜として搬入され特に異常は認められなかった．

肉眼所見：と畜解体時に多臓器に白色腫瘤が認められた．肝臓実質では，小豆～鶏卵大の腫瘤が密発し，一部では中心部が壊死，空洞化していた．第三胃漿膜面及び大網周囲は不規則な肥厚を示し，第三胃の割面では漿膜下に滑沢で中等度の硬度を有する白色組織の増殖が認められた．肺では，肺胸膜下に針頭大～小豆大の腫瘤が認められた．このほか，肺縦隔及び肝門リンパ節には，著しい腫大及び同割面における白色結節の形成が認められた．

組織所見：第三胃腫瘤部では，類円形～紡錘形の腫瘍細胞が漿膜下から平滑筋層にかけてび漫性に増殖し，脈管浸潤像も認められた．細胞密度が高い充実性部位では，壊死巣が認められ，間質周囲では成熟脂肪組織が散在していた．腫瘍細胞の形態は多様であり，淡明な核をもつ類円形細胞が主体を占め，その他にやや濃染する紡錘形細胞が混在し，空胞を有した印環細胞やくもの巣状細胞も散見された．その他の病変部においてもほぼ同様の腫瘍性病変が認められた．

オイルレッドO及びズダンブラックBによる脂肪染色では，一部の腫瘍細胞の細胞質に脂肪滴が確認された．免疫染色では，腫瘍細胞はビメンチン（V9，㈱ニチレイ，東京）に陽性，サイトケラチン（AE1＋AE3，㈱ニチレイ，東京）に陰性，S100（㈱ニチレイ，東京）では一部の細胞が陽性を示した．これら染色結果は各臓器の病変部に共通していた．

診断名：脂肪肉腫

討議：脂肪滴を確認できた細胞が一部に限局していたので，その他の間葉系腫瘍との鑑別が討議の争点となった．

3　豚の肝臓腫瘤

〔對馬真由歌（名古屋市）〕

症例：豚（雑種），雌，繁殖豚．

臨床的事項：健康畜として搬入，著変は認められなかった．

肉眼所見：肝臓の臓側面に小児頭大の腫瘤が認められた．腫瘤は凹凸があり被膜に覆われ，割面は淡灰黄色を呈し大小不整形の結節で構成されていた．

組織所見：腫瘍組織と肝組織は結合組織で明瞭に区画され，大小複数の結節に区画されていた．腫瘤と正常肝組織との境界部では胆管の増生もみられた．結節内では肝小葉や三つ組み構造は認められず，腫瘍細胞が充実性，胞巣状，播種状に浸潤増殖し，複数の層からなる索状配列が認められた．また，一部で腺腔様構造もみられた．腫瘍細胞は，核小体明瞭でクロマチン豊富な大小不同の類円形核をもち，核分裂像も散見された．免疫染色では，抗サイトケラチン抗体に陽性，抗Ki-67抗体に陽性であった．

診断名：肝細胞癌

討議：本例は肝細胞腺腫や過形成とも考えられたが，腫瘍細胞が多層化した索状構造を示す構造異型や核の大小不同，核分裂像，多核細胞などの細胞異型があり，腫瘤中心部での胆管増生もみられなかったことからも悪性と判断する根拠となった．

4　牛の腹腔内の腫瘤

〔田中明希子（福岡市）〕

症例：牛（ホルスタイン種），去勢，18カ月齢．

臨床的事項：と畜12日前より，発咳，肺胞音粗励，左側肋間にping音聴取．加療するも効果なく，予後不良と診断され，第四胃変位の診断名で病畜として搬入された．

肉眼所見：横隔膜腹側面，肝被膜，小腸・大腸漿膜に5～20mm大の腫瘤が播種性に認められた．腫瘤は乳白色充実性で弾力に富み，周囲に暗赤色線維素の析出を伴っていた．横隔膜腹側面には，大部分を壊死組織が占める直径20cm大のやや脆弱な腫瘤も認められた．胃には重度の癒着，出血，壊死が認められた．また，後縦隔リンパ節の顕著な腫大が認められた．

組織所見：各腫瘤部及び後縦隔リンパ節において，腺管状，乳頭状，充実性及び胞巣状など多彩な形態で増殖する腫瘍組織が認められた．腫瘍細胞は，大小不同で，円形，多角形，円柱形など多形性を示し，細胞質は大小の空胞を有し，好酸性で明るく豊富であった．腫瘍細胞の核は大小不同で異型性を示し，1～複数個の明瞭な核小体を有していた．核分裂像，多核細胞及びアポトーシス小体が散見された．腫瘍組織の間質の一部には骨化生が認められた．また，免疫染色の結果，腫瘍細胞はCytokeratin（AE1/AE3），alpha-fetoprotein及び胎盤性アルカリフォスファターゼに陽性，Cytokeratin(5/6)及びVimentinに陰性を示した．

診断名：胎児性癌

追加：当初は中皮腫との診断名が下されたが，胃癌や胎児性癌との鑑別を行うため再検討となった．追加の免疫染色及び形態学的特徴より胎児性癌と最終的に診断した．

5 牛 の 肝 臓

〔水澤昌子（秋田市）〕

症例：牛（黒毛和種），去勢，28カ月齢.

臨床的事項：ビタミンA欠乏症疑いとの病名で病畜搬入．血液所見から，肝障害が疑われた.

肉眼所見：肝臓は50cm大に腫大し，辺縁は鈍であった．び漫性に黄褐色を呈し，出血斑が散在し，深部にも及んでいた．肝リンパ節は軽度に腫脹し，胆嚢にかけての周囲の脂肪組織に水腫がみられた.

組織所見：全体的に肝細胞は変性を示し，索状配列は乱れ，類洞は拡張し間葉系細胞の増殖がみられた．小葉中心性に出血と肝細胞の壊死が認められ，壊死部では好中球やリンパ球などの浸潤がみられた．グリソン鞘において炎症細胞の浸潤を伴う結合組織の増生が認められ，胆管の増生がみられた．肝細胞の細胞質内に，大小さまざまな好酸性硝子滴を，1つの細胞に1～数個認められた．この硝子滴は壊死部に限らず全体的に観察され，PAS染色に強陽性で，ジアスターゼ抵抗性を示した．免疫染色では，多くの肝細胞がα-フェトプロテイン陽性を示した．また，間葉系細胞の一部がデスミンに陽性を示し，伊東細胞の増殖が示唆された.

診断名：硝子滴変性の顕著な肝細胞の変性・壊死

6 牛 の 肝 臓

〔塚本展子（埼玉県）〕

症例：牛（黒毛和種），雌，29カ月齢.

臨床的事項：一般畜として搬入．起立困難.

肉眼所見：肝臓にやや硬度を有する直径2～4cm大の，灰白色から黄白色腫瘤が密発していた．腫瘤は円形で，肝臓表面からやや隆起して認められた．肝臓の割面にも同様の病巣が認められ，黄白色充実性を呈していた．周囲組織との境界は明瞭であった．また，枝肉及び内臓脂肪の黄変が顕著であった.

組織所見：肝臓にみられた結節内は，細胞退廃物により充満していた．実質と結節の境界付近に，桿菌がみられた．多くの肝小葉内の類洞は乱れ出血を伴い，グリソン鞘内にもリンパ球を主体とした炎症細胞の浸潤が認められた．グラム染色で，肝臓結節周囲の肝実質内にグラム陰性桿菌が認められた．免疫染色では，抗*Fusobacterium necrophorum*家兎血清に陽性を示した.

血液検査所見：血中総ビリルビン値は8.1mg/d*l*であった.

診断名：*Fusobacterium necrophorum*による壊死性肝炎

7 豚の肝臓腫瘤

〔稲葉夏深（長野県）〕

症例：豚（LW），雌，約3歳齢.

臨床的事項：一般畜として搬入，著変は認めらなかった.

肉眼所見：内側右葉先端に周囲との境界明瞭な直径2cm大の桃白色腫瘤を1つが認められ，その近くには直径2～3mm大の小腫瘤を2つが認められた．最大腫瘤割面では充実性組織内に大小の嚢胞の形成がみられた.

組織所見：腫瘤は，広く淡明で脂肪滴を有する細胞質か，それより狭く細顆粒状で少量の糖原を有する細胞質をもつ細胞群による腺房状増殖と，好塩基性の強い細胞質をもち粘液の産生を伴う単層上皮細胞の管状，乳頭状及び篩状増殖から構成されていた．両成分は腫瘤内で一様に近接し混在していた．腫瘍細胞の核は弱い異型性を示し，核分裂像は認めなかった．線維性の間質にはリンパ球主体の炎症性細胞浸潤が認められ，腺房を細かく区画する間質と腫瘍細胞との間に特徴的な間隙が認められた．最大腫瘤内には疎な粘液性の間質もみられ，嚢胞は単層の扁平細胞で内張りされた結合組織で構成され，内腔に好酸性物質とわずかに赤血球を容れるものもあった．抗サイトケラチンAE1/AE3による免疫染色では，胆管様の単層上皮細胞は陽性を示し，腺房状増殖巣の細胞質の狭い細胞に一部陽性が散見された.

診断名：肝胆管細胞腺腫

（以降，次号につづく）